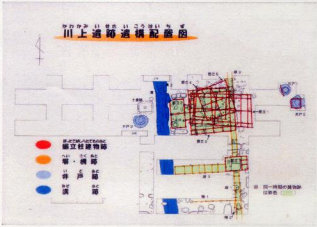
川上遺跡

縄文時代から中世にかけての遺物の散布が見られる当遺跡は、名取市農協高館支所の移転に伴い、昭和63年発掘調査が行なわれました。

発掘調査で検出された部分は、中世の時期を主体としており、溝や塀跡で区画された建物跡、掘立柱建物跡の規模やその配置状況から一般集落とは異なり社寺的性格（宿坊）のある遺構群が発見されました。出土遺物についても、陶磁器が多く、常滑産や渥美産・地元産と思われる陶器（壺・瓶・擂鉢）、中国龍泉窯より輸入された青磁（碗・双魚文）が見られます。こちらの状況から主な中世の遺構は、13世紀後半～15世紀頃（鎌倉後半から室町）と考えられ、周辺の歴史的環境から熊野那智神社に関係する宿坊跡と思われます。

Ⅱ-22-①



Ⅱ-22-②

Ⅱ-22-③-a

溝跡

Ⅱ-22-③-a

Ⅱ-22-③-b

井戸跡

Ⅱ-22-③-b

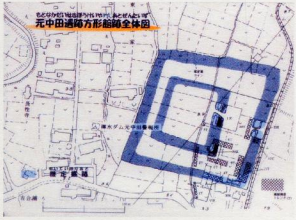
Ⅱ-22-③-c

元中田遺跡

当遺跡は宅地造成計画に伴い、平成9年に発掘調査が行なわれ、縄文時代から近世にかけての遺物や遺構が発掘されました。

特に中世の時期につくられたとみられる二重に堀をめぐらした方形館跡は、外堀が約150m四方の規模を持っており、常滑・瀬戸・美濃産の陶器（鉢・壺・皿）や中国龍泉窯産の青白磁（碗・壺）、天目茶碗、擂鉢、香炉などが出土しました。この屋敷跡は15世紀末～16世紀末頃の国人領主クラスの遺構と見られます。

Ⅱ-23-①



Ⅱ-23-②